

講義の風景

文学部

矢島正見教授

Yajima Masami

現代社会研究(5)

[水曜3限/1-3年次]

傾斜の激しい3114教室は6割方、席が埋まっている。ばんばんに膨れた紙袋を重そうに抱えて、教授の登場である。次週に使われる7枚のレジュメだった。それに、卒論用か、学部生がマイクをとって、個人研究の調査アンケート用紙も。授業の間を利用して、社会学専攻ではよくあることらしい。それが前列に並べられ、学生が順に取っていく。ざっと14

0人もいるから、けっこう時間がかる。「ノロいなあ」というように、教授は学生の間に割り込んで、それも女子学生の背をヒジでこずくようにして分け入り、7枚セットができたら、手渡して最後尾の学生に。それが効率的だったかどうかは微妙なところで、学生も苦笑している。そ

学部で「セクシュアリティ研究」のゼミにいる記者もそちらのほうに関心があるのだが……。

やじま・まさみ 1948年生まれ。

中央大学大学院文学研究科社会学専攻博士課程修了。日本社会病理学会会長、財団法人青少年問題研究会理

事長などもつとめる。専攻は犯罪社会学、社会病理学、性社会学。著書に、『戦後日本女装・同性愛研究』『少年非行文化論』など。

裏から表から「病理の社会学」

鋭角的に、またユーモラスに

んな教授の茶目っ気も学生を惹きつけるのだろう。10月18日、後期2回目の教室も盛況である。

「一般(正常)の社会学」と、もう一つ「病理の社会学」。「社会学は2つに分かれてしまっている、という批判から講義が始まった。正常なるものと病理なるものとの連続性・相互性の講義である。「女装」に「少年犯罪」……プロフィールにあるように「病理の社会学」の専門家、

美徳が悪を…

〈美徳が悪を生む〉

と板書する。R.K.Mertonの言葉だそうだ。

「悪が悪を生む」というのはよく聞く話だが、教授によれば、それは

「医学モデルに基づいた病因論的な視点」ということになる。例えば、不登校は社会的にマイナスと認識されている。したがって、マイナスの不登校を引き起こす原因もマイナスとみなす。そこから、教育が悪い、学校が悪いと原因に悪を求めることになる。つまり結果が悪ければ原因も悪い、という思考だ。では「美徳が悪を生む」とはどういうことか。

教授が例に挙げたのは成人病。人間は生きていく上で必要なもの(塩分、糖分など)を貪欲に吸収しようとするが、それが成人病などの病気を起こす原因となる。医学モデルです。今は「美徳が悪を生む」時代なのだ。ああ確かに……。

非行少年の、プライドを傷つけられたら殺しても反抗するということ。「太く短く生きる極道な考え方」はどうなのか、と進む。

「この考え方は犯罪者の文化だけではなく、貴族文化や有閑階級文化の中にもあったんですね」。これも



威厳と洒脱、直球と変化球…矢島正見教授

意外な指摘だ。貴族文化に極道な考え——つまりはこういうことだ。貴族は自分が汗水流して働く必要はなく、男は狩にスポーツに精を出し、もし自尊心を傷つけられるようなことがあれば即決闘という太く短く生きる精神を持っていた。この貴族文化はブルジョアジーの出現によつ

て潜在化し、勤勉や誠実さや思いやり、優しさが表の文化へと変化していく。だが決して貴族文化が消滅してしまつたわけではなく、その文化を今でも引きついているのが非行文化である、と指摘する。

非行少年の言い訳は「相手が悪い」、「自分は悪くない」、「他人に迷惑を

かけてない」、「もつと悪い奴がいる」などと5つに分類できるといふ。彼らは、これらの言い訳をすることによって「罪悪感を中和して非行に走れる状態」を作りだしているというのだ。記者も親に似たような言い訳を使うのだが、驚くことに、その言い訳を作つたのは研究者をはじめ、弁護士、教育者、ジャーナリストなどのいわゆる世の中の「立派」な人たちだそう。誰かが作つた正義（「非行少年は学校教育の被害者」など）が悪（「非行、犯罪」を生んでしまうという逆説である。

アメリカのハーシーという学者は、非行や犯罪に対する動機というもの人間が本来的に持っているものと述べている。もし、人間を生まれたままに好きなようにさせておけば全ての個人は自然に犯罪を行うようになるだろう。従つて、「何故人は犯罪を犯すのか」という問ではなく、「何故人は犯罪を犯さないのか」という問が大切であり、個人にどんな

抑止がかかっているのかを考えることが大切なのだ、と説いている。

爆笑、微笑、苦笑い

授業が始まってまもなく、あることに気づいた。5分に1回ほどの割合で語尾に「ええ」がつく。「……です、ええ」「……なんです、ええ」といった具合に。教授の口調を真似する学生も多いんじゃないかしら？

なんて思っていると、こんな話が飛び出す。「若い時は人生は楽しい、私みたいなジジイになって恋をしてどうする。本当は今でもしたいけど」

……教室が爆笑に包まれた。必修でもないのにこれだけの生徒がコックリもせず、私語もほとんどなくノートを熱心に取っている授業は珍しいのではない。矢島教授のポーカーフェイスと発言や所作のギャップの観察もこの授業の魅力なのだろう。

病める関係性

テキストは矢島教授の『病める関



係性―ミクロ社会の病理』（共編著）。執筆時の裏話なども織り交ぜながら、

講義は「病める関係性の時代」へと移っていく。テキストをもたず手ぶらで聴講の記者は内容理解にやや心もとないのだが、「公」と「私」の関係が、今では「公」↓「私」に移り変わりつつある、という時代論。いってみれば、昔は「2人は世界の

ために」だったのが今では「世界は2人のために」に変化した、と。教授は分かりやすい例を挙げる。「『北朝鮮問題という公的問題は私個人の問題である』という公を私の中に取り込んだ関係から、今では、たとえば、フェミニストが女性の解放を唱えるのは『私の個人的問題は全女性の問題である』と、私的問題の公的問題化がなされる」という公が私化する時代へ移行している、と言う。デュルケーム流に言えば「個人の個人による個人のための社会」の形成が行われているのだ。

近現代社会は「自分の好きなように生きるのが正しいこと」という思潮の時代だ。自己選択の時代である。それ故に、自己責任が問われる。それは、個人の尊重↓個人の自由↓個人の責任と連鎖する。ベックの「個人化」である。こうした個人にリス

クがかかる時代への対処として、共編者の森田洋司氏は、政府任せは危険であり、NPOや地域において問題を解決する必要がある、と本書で警告を発している。

取材費は出ないの？

序章を終え、これで終わりと思っている学生に、「まだ終わらないですよ」と言って来週のテーマの自殺に少し触れたところでチャイムが鳴った。

取材前に矢島教授からいただいたメールに、今回の授業について「おそらく一番面白くない」（記者が）テキストを持っていないので死ぬほど退屈」と書かれていた。カタイままの内容かと身構えていたのだが、どうして、意表をつく視点の連打。しかし、やっぱりテキストがないと厳しい。そんなことを思いつつ授業の後に挨拶に行くと、いきなり、

「取材費は出ないの？」
と質問された。取材費？ 「先

生へのギャラですか？」とびっくりして答えると「そうじゃなくてあなたに払われるやつ。取材費出してもらってこのテキスト買いたくない。じゃないと授業分かんないから」。今まで何人かの教授にインタビューしてきたがそんなことを言われたのは初めて。「編集長に相談してみます。ええ」。その足で編集室に立ち寄ってその旨を伝えたのだが、太っ腹な編集長は……どうだったんでしょうねえ。

今後の授業では、ひきこもりや非行、虐待の問題などニュースでもよく聞く話題を取りあげていくそうだ。「死ぬほど退屈」でこれほどだから、「過激でシャープ」な現代社会の病理学が展開されるだろう。「そっちの方に来てください」と言われ、本当は学部の履修している授業があるけどこっちに来ようと、こっそり心に決めて教室を去った。

（学生記者 大池夏末∥総合政策学部3年）